

近・現代美術に関する調査研究と資料集成 (シ03)

研究組織 江村知子、橘川英規、吉田暁子、城野誠治、黒崎夏央、(以上、文化財情報資料部)、塩谷純(上席研究員)、三上豊、丸川雄三、田中淳(以上、客員研究員)

目的 日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品及び資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。

成果

○近・現代美術の調査研究

- 岸田劉生の大正期の静物画、《静物(手を描き入れし静物)》(1918年、個人蔵)、《静物(白き花瓶と台皿と林檎四個)》(1918年、福島県立美術館)、《静物(茶碗と湯呑と林檎四個)》(1917年、大阪中之島美術館)、《静物(赤林檎三個、ブリキ罐、茶碗、匙)》(1920年、大原美術館)などについて光学的調査を行った。その成果の一部は当研究所オープンレクチャーで口頭発表した。
- 近代日本画の展開についての研究を進め、口頭発表を行った。
- 近代日本画の展開についての研究を進め、口頭発表を行った。
- 黒田記念館に収蔵される黒田清輝による油彩画148点の光学調査データを、黒田記念館のウェブサイト上で公開した。
- 吉田ふじを(1887-1987)の作品・資料についての調査を外部研究者と協力して着手した。

○資料の収集

- 戦後の日本美術教育に大きな影響を及ぼした創造美育協会の本部事務局長を務めた島崎清海(1923-2015)の資料のうち、同協会の発行物や同時代美術家との交流を示す書簡などをご遺族から寄贈を受け、アーカイブ化のための作業を行った。



岸田劉生作品の調査



研究会発表風景

論文

- 吉田暁子:「『壺』幻視—新収蔵の岸田劉生《壺》を契機として—」『視る』518 pp.2-5 京都国立近代美術館 22.5

発表

- 吉田暁子:「岸田劉生の静物画—「見る」ことの主題化」東京文化財研究所オープンレクチャー 22.11.8
- 塩谷純:「中井宗太郎「国展を顧みて」を読む」文化財情報資料部研究会 22.12.23